

第53回日本皮膚免疫アレルギー学会 学術大会を開催して

(2023年12月8～10日)

※グランドニッコー東京ベイ 舞浜とWeb配信のハイブリッド開催

吉原 渚

順天堂大学大学院医学研究科皮膚科学・アレルギー学准教授

はじめに

第53回日本皮膚免疫アレルギー学会学術大会を千葉県舞浜で開催しました(図1, 2)。新型コロナウイルス感染症が5類に分類された一方で、医療従事者として感染拡大を極力避けることに注力しながらの開催となりました。最終的な登録者数は978人で、現地来場者は605人と多くの先生方に直接現地参加していただき、アフターコロナではありながらも平穏な日常がつついに戻りつつあることを実感いたしました。



図2 会場内の様子



図1 会場エントランス

テーマ

本大会のテーマは「Discover Your Favorites and Interests」としました。

免疫学・アレルギー学が急速に進歩している中で、各分野の疾患概念や発症機序の解釈が分化と統合を繰り返す、すなわちパラダイムシフトが頻繁に生じており、わかったと思ったらただちにわからないことが出てくる状態です。まさに各分野の疾患が多因子性疾患であることの真骨頂を示していると思われます。すでに得意と思っているモノ、興味があるモノがおありの方々も、改めて各分野のエキスパートの講演を受けていただいて、知識の確認・再認識をしていただくとともに「童心に戻って」面白そうなモノ、興味をそそられそうなモノをみつけてもらうことを願い、本テーマを選びました。

また本大会は東京ディズニーリゾートに位置す



図3 カジュアルな飲食コーナー「ワインのゆうべ」を設置

るグランドニッコー東京ベイ 舞浜で開催しました。東京からのアクセスは良好でありつつも、都会の喧騒から離れ、気分が明るくなれるように会場を選定いたしました。

プログラム

本大会のプログラムは、10本のシンポジウムと4本の教育講演から構成され、エキスパートの先生方にとっても勉強中の若手の先生方にとっても興味深い内容であったと思います。最終日に開催されたシンポジウム「徹底討論！ 膠原病・血管炎 ケーススタディ」は、大会初日・2日目の一般演題で発表された症例報告を再度振り返り討議するという、趣向を凝らした内容でした。

招請講演には東京大学大学院医学系研究科遺伝情報学の岡田随象先生に「遺伝統計学による皮膚免疫アレルギーの病態解明」と題して、大容量のゲノムデータを適切に解釈し得られる情報から疾患の病態解明や新治療法を確立することについてご講演をいただきました。

特別講演では、大阪大学大学院生命機能研究科細胞内膜動態研究室の吉森 保先生に「オートファジー：感染と老化に対抗する細胞の守護者」と題して、オートファジーの基礎的なことから最新の知見までを聴講者にわかりやすくご講演いただきました。オートファジーが皮膚科疾患領域にも関係していることが想像でき、胸が高まる内容でした。招請講演・特別講演ともに会場は満員の大盛況で、



図4 「ワインのゆうべ」でのひとコマ

活発な討論が繰り広げられていました。

また、一般演題は152題の登録があり、臨床から研究まで多岐にわたる分野における新しい知見に關しての報告をしていただきました。演題に応募してくださった先生方に心から御礼申し上げます。

お楽しみ

コロナウイルス感染症に留意しなくてはならなかったため、参加の先生方全員をお招きする懇親会開催を断念し、学会2日目の夜に「ワインのゆうべ」としてカジュアルな飲食コーナーを設けました(図3)。ワインを片手に大学や所属施設の垣根を超えた交流を行うことができました(図4)。

おわりに

本学術大会を成功裏に終えることができたのは、各委員・座長・演者の先生方のご尽力あってのことでした。関係各位に心より感謝申し上げます。